

氏 名(本 籍)	いけ がみ か なえ 池 上 香 苗 (新潟 県)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,587 号
学位授与年月日	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	芸 術 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	近代日本彫刻の形成に関する考察 —光雲懷古談を中心に—
主 査	筑波大学教授 伊 藤 鈞
副 査	筑波大学教授 文学博士 相 馬 隆
副 査	筑波大学教授 仲 瀬 律 久
副 査	元筑波大学教授 博士(芸術学) 宮 脇 理

論 文 の 要 旨

本論文は、明治時代の初期より活躍した日本の伝統的な木彫家の 1 人である高村光雲の口述著書「光雲懷古談」(万里閣書房, 昭和 4 年)を中心としてその論述内容の分析を行い、そこに見られるさまざまな彫刻観の存在を通して、わが国のいわゆる西欧化に伴い出現した日本近代彫刻の形成過程を明らかにすることを目的としている。「彫刻」と呼ばれる概念と活動が、江戸末期から明治期にかけての日本の近代化の流れの中で新たに形成されて行く過程と、その構造に焦点をあてて解明しようと試みたものである。

近代化という価値体系の変革の嵐の中で、日本の伝統彫刻に対する認識がどのように変わって行ったか、また西欧から移入された彫刻の技術や概念がどのように受容され、そして変容していったのかという日本彫刻の近代化の問題を、職人的な木彫家の視座を通してさらにはその受容者の動向も視点に入れて考察し直している。

「光雲懷古談」は、近代日本彫刻史の 1 つの文献資料として多くの研究者に活用されており、その部分復刻版である「木彫七十年」(中央公論美術出版, 昭和 42 年)は、明治大正期を代表する木彫家が、自らの人生と作品について語った一種の彫刻論として彫刻家には読まれている。一方、同じく前半のみの復刻版として出版された「高村光雲懷古談」(新人物往来社, 昭和 45 年)は、江戸情緒の色濃く残る東京の風俗文化の記録としても一般読者の支持を得ている。そして、昨平成 7 年に岩波書店より酒井忠康解説の「幕末維新懷古談」と改題出版されている。このように、それらの資料をどのように読むかは、読者の背景となる知識や時代などに負っている。また、資料の読まれ方とその読者層は、現在と昭和 4 年の「光雲懷古談」が出版された当時とでは大きく違っている。それは近代美術としての彫刻をとりまく時代や状況の変化、光雲への評価の推移などに起因している。

「光雲懷古談」を中心資料として「木彫七十年」、「高村光雲懷古談」および「幕末維新懷古談」の 3 書の記述を彫刻の制作者や作品だけではなく、その受容者からの視点に着目した読者論の方法も用いて比較検討する。それによって近代日本彫刻の成立過程を、これまで西欧化や国粹主義の反動といった図式で捉えられていた視点では解決できなかった問題点について、新たに異文化の受容と変容といった視点から論究する。

本論文の構成は、序章、本論、結章の 3 部からなる。

序章では、研究の主題を明確に把握し問題点の所在とその研究方法を探るために、1. 研究の目的と意義、2. 近代化と日本彫刻、3. 先行研究の検討、4. 研究の方法と展開の 4 節に分けて論じている。

本論は3章に分けられている。

第1章 「近代日本彫刻の形成期における彫刻観の分析」は、形成期における彫刻観の分析を5節に分けて具体的に考察する。各節の論考テーマは、1.「光雲懷古談」の研究小史、2.「光雲懷古談」の初期の受容の特質、3.「光雲懷古談」の近年の受容の特質、4.「光雲懷古談」の受容に見る彫刻観の変遷、5. 変化する彫刻の概念、である。本章ではこの論文の中心的分析対象である「光雲懷古談」の受容の歴史と特質、そしてその全体の構造を解明することによって、広くこの懷古談を受け入れた社会の彫刻観の変遷を概観し、同時に近代日本彫刻における研究の流れとその特質、そして問題点を浮かび上がらせている。光雲の同世代、師匠や父、祖父の世代そして息子である光太郎の世代といった時代による美意識の違い、さらに日本の伝統や西欧文化に対する認識の違いを浮かび上がらせ、それらが「彫刻」という概念に反映していく様子を具体的に探る。文学論における文体学の手法を用い、光雲の深層意識にまで迫り、出版の背景から掲載写真まで幅広く原本と復刻3書を比較分析することにより、彫刻に対する認識の推移を明らかにしようとしている。

第2章 「近代日本彫刻の形成における伝統文化の影響」では、幕末から明治にかけて制作者と受容者が、実際どのような彫刻と関わりを持っていたのかを10節に分けて論考している。各節のテーマは、1. 幕末における町人の職業選択観、2. 鎌倉以降の仏師と仏教の関わり、3. 仏師出身彫刻家・工芸家の正統派意識、4. 横浜貿易の興隆にみる彫刻師の彫刻認識、5. 制作者に内在する家職意識と個の意識、6. 仏像の需要と供給をめぐる量と質の問題、7. 華客観に見られる江戸と明治の連続性、8. 江戸後期の造形文化の近代性、9. 徒弟制における師弟観と教育、10. 光雲の作品に見る造形観、である。本章では江戸後期下層町民の生活実態を考察した上で、光雲の生い立ちを分析し、仏師や宮彫師の家系でなかった光雲が彫刻師の道を選び木彫に固執した背景、彫刻に対する光雲の価値観および華客観、そして当時の仏師や彫刻師たちの置かれた社会状況を明らかにしている。この中で光雲がその仕事の見事さを賞賛した見世物細工の「生人形」にも触れ、次世代の彫刻家たちの徹底的な否定にも関わらず、人形工芸と彫刻の接点を認め、また、洋風彫刻の中で最も親しまれるようになった銅像も、実は、日本の肖像彫刻や神像彫刻の伝統が、西欧の人物彫刻を受容する際の文化的な下地となっている点に着目し論述している。さらに、仏師の伝統を引き継ぐ師弟間の分業制による光雲の造形と造形観についても分析を行ないその特質を論じている。

第3章 「近代日本彫刻の形成における近代化の再考」は、5節に分けて、日本彫刻の近代化の問題を異文化の受容と変容、未知の技術や概念の普及等の問題として検討している。各節の論考テーマは、1. 西欧化と日本の近代化、2. 異文化受容と在来文化の価値観、3. 名匠伝の影響、4. 近代化と創成期の彫塑教育、5. 彫刻活動の分析と考察である。ここでは光雲の師弟観と徒弟制の現状、光雲の関わった東京彫工会における普及活動、工部美術学校や東京美術学校における創設期の教育について、新たな視点からの考察を行なっている。

結章は、序章及び本論の纏めとして、1. 近代日本彫刻の形成、2. 今後の課題、の2節で構成される。明治政府が欧米諸外国を意識し上からの文化政策、殖産政策を押し進める中で、白紙の状態から出発した洋風彫刻とは異なり、光雲のような一流の技術をもった伝統的な仏師や宮彫師の多くは、職人から美術家に転身した。そうした状況に対して本人たちも世間あまり抵抗感を持たなかった。しかし、西欧に学び、人体を主体とする立体造形こそが彫刻であるとする彫刻家の新しい価値感、見世物細工的な身体感や美意識に慣らされた一般受容者には、馴染まず受け入れ難いものであった。西欧から新しい技術や概念を移入することが近代化であり、進歩であるとする立場からは、こうした現実の評価されることは無かったが、油土の使用や粘土原型からの石膏取り、コンパスによる星取り複写法といった新しい技術や知識の定着はあっても、彫刻の概念自体は在来の価値観の抵抗もあって、なかなか根付かなかった事実に着目すべきである。光雲がその結成に深く関わった東京彫工会の歴史や、光雲が木彫科教師として教えた創設期の東京美術学校での教育を通して、明治期の政策者や行政官、美術家や研究者、教育者の彫刻や工芸に対する認識とその変化の中に、近代国家形成を至上命題とした時代の中で実学が尊重され、美術の分野も産業や体制に役立つ事をつよく求められ、彫るものによって、彫刻が次第に美術と

工芸に区別されていく過程を追うことができる。「光雲懷古談」および復刻3書の比較検討により、伝統的な彫刻師が彫刻家として日本の近代化に組み込まれていく過程と、その受容者との関わりの中に、近代日本彫刻の成立期の重要な問題点の1つが解明されることを指摘しその結論としている。そしてさらに今後の課題の中で、彫刻論発展のためには困難ではあるが、受容者論という新たな視点からの彫刻論の必要性を提唱し、文学における読者論の援用を指摘している。なお巻末収録の関係図版写真は57点、参考資料は171編に及んでいる。

審 査 の 要 旨

この論文は、明治期に活躍した伝統的な木彫作家であり、後の彫刻家高村光太郎の父でもあった高村光雲の「光雲懷古談」及びその復刻版3書の比較分析によって、近代日本彫刻の形成期における特質を解明しようとするものである。著者はその履歴からも解るように、塑造を中心とした彫刻の作家として日展や日彫展等に出品し、入選を重ねている制作者であり、そして、実作に裏付けられた理論的研究者の育成を目的に、芸術学研究科に設置された美術論分野の学徒でもある。しかし美術論はまだ出発したばかりの若い学問分野であり、その学的方法論は確立されたとは言いがたく、現在は他分野の方法論の援用による模索の状態でもある。これまで彫刻家や専門家には読まれながら、とかく一般図書と目されていた「光雲懷古談」に著者が着目したのは、この本の口述者が著名な木彫作家であり彫刻の教師でもあったという点にある。そして同懷古談は版を重ね、さらに38年後と41年後および平成7年にそれぞれその一部分が取捨選択されて復刻されている。著者はその点にも注目し、4書出版の背景にある読者層および時代の変遷の中で、工部省附属美術学校の開設により移入された西欧彫刻と日本の伝統的な彫刻観との確執、そして伝統美術育成のために設置された東京美術学校での、光雲による木彫科の開設といった近代日本彫刻形成期の特質と諸問題の分析を行なっている。

光雲の造形活動とその根底をなす職業観、華客観、技術観、師弟観は江戸末期から明治期にかけて光雲が受容した造形活動や、光雲の造形活動を受容した日本の文化によって形成されているのであり、近代日本彫刻の形成に関わったのは工部美術学校も含めて、決して一部の彫刻家や教育者、学者、美術愛好家だけではなかったことを探り出している。そしてさらに、その後の彫刻観の変遷を制作体験者の視点から探求し、現代の日本彫刻の特に制作上での新たな可能性を模索することを意図している。

以上のような著者の本研究の意図は、美術論の一つの課題として正鵠を得たものであり多くの資料に基づいた論考の成果も十分認められ、論文の章の組立てや方法論にやや未熟さは残るが、その妥当性を認める事ができる。しかし文学における文体論、読者論を援用している点などの美術分野での異質性、付属資料の採択方法、そして一般受容者層への教育普及の可能性への、著者のやや楽観的とも取れる思い込みなどには異論が無いわけではないが、特に当事者とも言うべき光雲という彫刻制作者をして語らしめた「光雲懷古談」を中心資料として、技術者光雲の彫刻認識の推移を探り、近代日本彫刻の形成期の特質と諸問題の解析を行なった点には特筆すべきものがあり、美術論としての一つの成果を認めることができる。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。